
めぐる

青木華絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めぐる

【Nコード】

N6863S

【作者名】

青木華絵

【あらすじ】

会議を終えた「僕」は早く帰ろうと階段を下りる。前には見知らぬ初老の男が二人。漫然と階段を下りながら、さまざまなことを考える。例の男性二人はいつも同じようなことを話している。「僕」はなおも階段を下り続ける。いつか着けるはずの一階を目指して…。

カツカツと乾いた音を響かせて、僕は階段を下りている。前には見知らぬ初老の男が二人。彼らは互いに見知った風で、時々肩を揺らしながら談笑している。それに割って入る術もなく、僕はただただ早くこのビルを出たいと思いながら、足を交互に踏み出し続けた。

このビルは僕が勤める会社の本社であり、会議が終わった七階のエレベーター付近は黒山の人だかりだった。百人単位の間人間がもれなく全員下に向かいたいと望み、その手段としてほとんどがエレベーターを選んだのだから、その混雑は当然だった。僕は様子をうかがって、早く帰宅するという目的を果たすならば、エレベーターを使用するより階段を下りた方が早いと断じた。そう考えた者も何人かはいて、僕の見限る限り七人ほど階段への扉を開いた。ばたばたと数人が一斉に階段を下り、人をかきわけて初老の二人が降り、彼らの開けた扉に滑り込んだのが僕だった。

階段を下り始めて三分ほど経った。どうしてこういったビルの階段はうすら寒く、雰囲気暗いのだろうとぼんやり思いながら足を動かし続けた。前の男たちは、未だに時々肩を揺らしながら談笑している。ふいに耳に届く話の内容は、自分の家庭での処遇であったり、地元野球チームの今年の展望であったり、自分の仕事と給料の不満だったりした。階段を下りる速度がほぼ同じなので、僕は彼らとつかず離れず階段下りを共にした。

階段を下り始めて五分ほど経った。どういふつもりか知らないが、この階段には階数表示がないことに気付いた。実際何階を下りてきたのか、現在何階にいるのか皆目見当がつかない。自分がどれだけ下りてきたかを考えられるほど、意識して下りてきたわけでもない。

前の男たちは、未だに時々肩を揺らしながら談笑している。ふいに耳に届く話の内容は、自分の妻と娘の冷酷さであったり、地元野球チームの監督の悪口であったり、自分の給料と税金への不満だった。下りていけば一階にいつかたどり着けるだろうとぼんやり思いながら、僕はなおも下へと向かった。

階段を下り始めて十一分ほど経った。この階段に明かりをもらすのは、もう何年も換えていなさそうな蛍光灯と小さな窓だけだった。蛍光灯のカバーは黄色く変色し、蜘蛛の巣がはっていたり、無数の蟲の死骸が黒い影を形成していた。蛍光灯自体の明かりも時々不安定に力なくちらついていた。頼みの綱である小窓には言いようもなく淀んだ空が映し出され、無機質な窓枠と相まって陰惨な雰囲気に乗乗効果を与えてみせた。前の男たちは、未だに時々肩を揺らしながら談笑している。ふいに耳に届く話の内容は、自分の夕食の冷たさであったり、地元野球チームの移籍選手の成績であったり、自分の給料の使い道に対する不満だったりした。やはり歩く速度は変わらないので、僕は彼らと見せかけの団体行動を続けた。

階段を下り始めて二十三分ほど経った。先日新調した革靴はまだ固く、新鮮な違和感を僕に感じさせた。運動するには履きなれた靴がいいと昔から色々な人に言われていたなと思った。階段はなおも続いている。ここで止めてしまつては全く意味がない。家に帰ることもできないし、元の七階に戻ることもできない。そういえば階段というものには、各階につながる扉があった様に思われた。今までそれがあつたかどうかと思つてみても、意識して下りてきたわけでもないため、どうであつたか思いだせない。しかしこのまま下りていけば冷たい色をした鋼鉄の扉が見つかるだろう。そう考えながら僕は手すりも使わず一步一步と踏み下ろした。前の男たちは、未だに時々肩を揺らしながら談笑している。ふいに耳に届く話の内容は、自分の洗濯物の扱われ方であったり、地元野球チームのドラフト一

位についてであったり、自分の仕事を時給換算してみた際の不満だったりした。階段を下りる速度はやはりほぼ同じなので、僕は彼らと団体行動の様に階段下りを共にした。

階段を下り始めて五十三分ほど経った。階段はなおも続いている。カツカツと揃ったような揃わないような、無機質な残響を起こしては消し、消しては起こし、僕は階段を下りている。階段全体は冷たい雰囲気につつまれており、きっとそれは経年劣化の著しい蛍光灯と小窓に切り取られた曇り空のみが光源であることに起因すると思われた。履き慣れない靴のせいか、足が少し痛い。どれだけの階段を下りたか、途中の階につながる扉があったかとも思い出せない。そういうえば階数表示も見えないなと考えもした。前には見知らぬ初老の男が二人。彼らは互いに見知った風で、時々肩を揺らしながら談笑している。ふいに耳に届く話の内容は、自分の家庭での処遇であったり、地元野球チームの今年の展望であったり、自分の仕事と給料の不満だったりした。前も聞いたような話だなど思いながらもそれに割って入る術もなく、僕はただただ早くこのビルを出たいと思うながら、足を交互に踏み出し続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6863s/>

めぐる

2011年10月8日16時31分発行